

露伴全集

第二十七卷

第二十七回配本（全四十二卷）

昭和二十九年八月十六日 第一刷發行

昭和五十四年六月十八日 第二刷發行

露伴全集 第二十七卷

定價 二千六百圓

著作權者

幸 田

文 ©

編 纂

蝸 牛 會

發 行 者

綠 川 亨

發 行 所

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六・六四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

一國の首都 明治三十二年十一月

普通文章論 明治四十一年十月

努力論

運命と人力と 明治四十三年十月

着手の處

自己の革新 明治四十三年一月

惜福の説 明治四十三年十一月

分福の説 明治四十三年十二月

植福の説 明治四十四年一月

努力の堆積

修學の四標的 明治四十四年三月

一

一六九

二九七

三一八

三二六

三二八

三四二

三五四

三六六

三七三

三七九

凡庸の資質と卓絶せる事功

明治四十三年八月

三九四

接物宜従厚

明治四十四年二月

三九九

四季と一身と

明治四十四年六月

四〇六

疾病の説

明治四十四年十一月

四二〇

靜光動光

明治四十一年三月

四三六

進潮退潮

明治四十五年七月

四七三

説氣 山下語

明治四十五年七月

五四七

後記

五八一

一國の首都

細目

首都の全國に及ぼす影響——國の首都に對する關係——國民は何人も首都を愛せざるべからず——都に對する愛情——江戸と江戸兒と——東京と東京人と——江戸と東京との相違——江戸の建設者、徳川氏、三河侍、甲州侍、其他——東京の建設者、明治政府、薩州人、長州人、其他——江戸の初期——東京の初期——薩長土肥の人士等が東京に對する愛情の缺乏——東京の墮落——明治の初年の情狀——現今の情狀——徒に首都を罵るべからず——東京の墮落せし所以——優者の放逸——劣者の卑劣——江戸の末路の墮落——我が首都をして至善至美ならしむるの道——都民及び國民の自覺——自覺は眞智也——自覺は眞徳也——首都に對する個人の位置の自覺——都府と個人との關係の緊密なること——都府に對して懷くべき至當の感情——都民自覺の機——江戸の破壊者は東京の土着の士となりたり——東京は江戸の民のみの東京にあらず——地方の人士は東京の人士となれり——自覺、信仰、理想、理想境——理想境と實在界——時代の理想——明治時代の理想境の首都——全般の理論と部分の問題と——東京に對する要求希望——東京を野の市たらしむべからず——東京を漫然たる人間集會處たらしむべからず——舊江戸人は萎縮し新東京人は自己中心に過ぎ居らずや——

東京を日本の東京たらしむべからず——東京は世界の東京たらしむべし——市政——
市内市外の區劃線——市の内外の區劃線の必要——日本と支那との城の意義の差——
都の無限の膨脹——都の面積と其實質——狭くして長き市、松坂——平面にして厚さ
無き市、白石、下田——都の面積と富との比例及び各般の設備の經費との比例——都
外は都外たらしむべし——都は都たらしむべし——都内の事物の配置は自然に任すべ
きや人爲に托すべきや——都の教育機關——都には幼稚園を要す——惡魔の幼稚園——
都の交通機關——都の道路——都の飲用水——上水水源の保護——都の惡水排泄——
江戸は人爲によりて成れる地なれば排水設計は最も努むべし——東京の卑濕の地——
塵芥糞尿排除の方法——理髮業者の取締り——共同浴場の取締り——火災盜賊の防
備——鳶と警察官と——半公半私土地專屬の準警察官を設くべし——盜賊取締り——
多く公園を設くべし——都の中等以下の民と公園との關係——公園は娛樂の地たらし
むるを要す——神祠は森嚴神聖を保つべし——神社の境内に幼稚園を設くべし——寺
院と都の中心との關係——墓地——市場——劇場、其位置、其構造、其品格——寄席
——遊び人——壯士——賭博、花牌——賣淫婦——江戸以前の賣淫婦——賣淫に對す
る二種の論者——事實の與ふる教訓——江戸の賣淫史——遊廓設置前の景況——遊廓
に對する命令——五ヶ條御條目——大門口御制札——町賣り禁止——遊廓の夜間營業
禁止——遊廓夜業禁止より生じたる結果——風呂屋者の勃興——遊廓存在の土地の狀

態の變化——遊廓の移轉——風呂屋取潰し——密賣淫に對する取締り——世譽と肉慾との關係——社會の好尙の標準——踊り子——藝子、藝妓——岡場所——江戸の漸々の腐敗——十八大通——肉慾の満足と榮譽心の満足と相伴へる時代——京傳と馬琴と——町藝者——江戸の大墮落、滅亡——東京の初期の遊廓の繁盛——藝妓の天下——娼妓及藝妓待合茶屋等の處置

一國の首都は譬へば一人の頭部の如し。各種の高等の機關こゝに備はりて、各般の經營運動の發するところとなり、又歸するところとなる。此故に全國に對する首都の勢力は甚だ大にして、首都の狀況の善惡は忽ち全國の狀況の善惡となること、譬へば頭部の狀況の善惡は直ちに全身の狀況の善惡をなすが如し。首都の狀況甚だ非にして其一國の運命甚だ旺盛なりといふが如きことは、萬有るべからざるの道理たり。首都は實に一國の運命の樞機のかゝるところにして、單に一個人の住居若くは腰掛け若くは足溜り等として看るべきものにあらず。

首都の物質上に於ける狀況は、一國の物質上に於ける狀況の先導となるものなり。即ち首都の有する建築の様式、市街の體裁、道路の構造等は、やがて他の都府及び小市の狀況に影響して、他の都府及び小市の漸々首都の風に化するに至るは、極めて明らかなる事實なり。此事實は各地方の小都市の明治以後の變化の狀態に對して一瞥を與へんには、何人も認め得るところなるべし。

首都が一國の人民の言語風俗、及び思想習慣、及び制度上に大なる力を有することも、また甚だ明かなる事なり。即ち首都の人民の好尚はやがて全國人民の好尚となり、首都の人民の思想はやがて全

國人民の思想となる等、無形上の變化を各地方の小都市に首府の與ふことは、極めて劇甚なるものなり。此事實は東京の猶江戸たりし時代より人の認知するところなりしが、交通の機關の整備するに近づくに従つて加速動的に顯著明白となりたり。

首都が全國に及ぼす勢力は是の如く大にして且烈し。然らば首都の狀況惡しからんには、全國は直ちに其惡影響を蒙るべきこと極めて明らかなることなり。さらば首都に對するの觀察を等閑にするは、必ず智者の背てせざるところなるべし。

首都が全國に及ぼす影響の事は姑らく之を擱きて、他の一面、即ち全國が首都に對する關係を考へんに、不健全なる身體は健全なる頭腦を有せざると同じく、疲弊せる國民の繁盛なる首都を有すべき理も無く、富力及び徳力智力の充實せる國民は決して惡しき首都を有すべき理も無し。此相互の關係の狀態は智者の必ず然りとして認知するところなれども、單に或場合に一瞥を與ふる時は却て首都榮えて一國衰ふるが如き現象を眼にする事無しとせず。されど其は一瞬時の現象にして、譬へば身體衰弱せる人の一時腦力鋭敏となるが如きのみ。遠からずして相互の關係の眞相は現はれ來るべき也。されば首都は國民の健康の度を卜すべき一検査器とも云ふべきにあらずや。即ち首都は國民を代表するにあらずや。國民の富力、徳力、智力の充實せるや否やは、首都實に之を代表し曝露すと云ふも誰かは敢て異議を插まん。

以上の二面の觀察によれば、首都は實に一個人の住居若くは腰掛け若くは足溜り等たらざるのみならず、また首都は即ち首都なりとして單に自體を存せるのみならず、一面には全國の指導者として、一面には全國の代表者として存するものにあらずや。かゝれば首都は首都に住する民の有する首都たるのみならず、全國民の有するところの首都たること論無きなり。噫帝國の内、いづくにか敢て我が日本國の首都たる東京を愛せずして可なりといふべきの民あらんや。首都好くんば吾人幸に其慶に頼らんのみ。首都悪しくば即ち如何。曰く、我が物と思へば眼の眩めき耳の鳴り頭の裂けんとする身をも厭はぬ習ひなるものを、如何で一國の首都の悪くとも、悪き首都なり、悪き首都なりと云ひ罵るのみにて餘所に捨て置くべき道理あらんや。悪きは悪きなり、善しとは云ふべからず、されどこれを改めんに何の憚るところかあらん。國民として其國の首都を愛せざるは、人としておのれの頭を愛せざる如き烏滸の癡者とは云ふべからずや。我が帝國の民は何人も首都の善惡に就きて影響を被るが故に、我が帝國の民は何人も首都の善惡に就きて、善きことを増すべき施設、及び悪きことを改むべき手段等に、望みを屬し、及び目を注ぎ、及び喙を容るべき權利あり又義務ある也。

詩人及び小説家等は、やゝもすれば都府を罪惡の巢窟の如く見倣し、村落を天國の實現の如く謳歌す。何事につけても觀察力のみ鋭敏に過ぎて施爲の能に乏しきを常とする詩人小説家等の、都會を好む能はずして村落を愛するに至るべきは勢ひ然るべき事ながら、悪しきものをば悪しとのみして抛

ち捨てんは仁恕の道にあらず。況や吾人は強ち都會を惡しとのみすべき理由を有する事なきをや。吾人は決して一派の詩人小説家等に雷同して、無責任に都會を厭惡嫌忌し之を嘲罵するのみに終るべからず。觀察の力の鋭敏なる人よりは其觀察の結果を藉りて、而して吾人が考量の資となし、吾人が執るべき改善の方法を定むべきのみ。吾人は決して自ら棄つるの言を爲し、また自ら棄つるの行を爲す國民たることを肯ずる能はざるべき筈なり。

然らば今の帝國の首府たる東京の狀況如何。喜ぶべきもの多き歟、喜ぶべからざるもの多き歟。帝國の首都として吾人は能く満足すべき歟、將た満足し難かるべき歟。吾人にして意聊か満足すれば止む、然らずんば終に言無くして止む能はざるなり。

都府とは何ぞや。是は言ふまでも無く自然の地盤の上に人間の建設せるところのものに屬す。さらば都府の狀況の善惡の由つて生ずる一切の樞機は、都府を形づくるところの人間の情意に存することは極めて明らかなる道理なり。即ち能く其都を愛重する人民は善き其都を有し、其都を愛する念薄き人民は完全ならざる其都を有すべきこと、譬へば一家の庭園に對する其主人の愛情の厚薄は直ちに其庭園の狀況に影響するが如くなるべし。見よ、愛さるゝところのものは狗だに其毛輝き、愛されざるものは其尾も力無し。愛は日の光なり、之に浴するものは生長し發達し繁榮す、之に浴せざるものは衰老し萎縮し凋枯す。都府既に人間の建設にかゝる以上は、愛の厚薄有無によつて善惡榮枯の狀況を

なすべき事必然の數なるに疑ひ無し。然らば都府の狀況を考ふるに先だつて、人民が都府に對する愛情の如何を考ふべきは當然の順序にして、都府に就て言を爲さんとするものの必ず注意すべき一點ならずや。況や都府の狀況をして善美ならしめんと欲すれば、人民をして其都府を愛せしむること一切の施爲の基礎根柢たらざるべからざるをや。

今の東京市民及び我邦一般の人民は、果して我が帝國の首都たる東京に對して眞摯嚴重なる意義に於ての愛情を有せりや、否や。往時の所謂江戸兒が江戸を愛したる如き、燃ゆるが如き意氣熱情を以て今の市民は我が東京を愛せるや、否や。往時の江戸兒が江戸を愛重せしは、其江戸兒なる一語、即ち其人と其地とを緊密に結合せしめたる一語を發する場合の情緒の如何を尋ねなば、何人と雖も明らかに解釋するを得べし。假令大都の住民たるを標榜して自ら悦ぶ三分の虚驕は有りしとするも、所謂江戸兒が、べらぼうめえ江戸兒だいと喝破する時の心情には、「我は江戸の人なり、江戸の人如何ぞ敢て卑劣の事をなさんや。濶達任俠義に仗り善に勵むは是我が江戸兒の面目にして、我既に江戸兒たる上は必ず江戸兒たるの面目を具ふべし。我は江戸兒たる也、我は我が愛重する江戸の民たる也」といふが如き傾向を有したるべきこと、譬へば士分の人の自ら、武士でござると云へる一語を發する場合には、武士といへる尊嚴潰すべからざるものと自己とを緊接し置きて、我豈武士たるに負かんと云ふ意を寓せるが如し。江戸兒の江戸を愛重せる實に深厚といふべきならずや。此等の消息は江戸時

代の小説戯曲等に於て、或は笑ふべき材として、或は重んずべき情の發現として採用せられたる事甚だ多ければ、何人も一二の例を舉示^{こじ}することを難しとせざるべき迄に明らかに知られたる事なりとす。然るに今の東京の人民は如何。世進みて無益の虚驕を悦ばざるに至れりとならば論無けれど、我は東京兒なりと稱して東京を尊重し、併せて自己を尊重することの何ぞ甚だ少きや。是東京の江戸に比して愛するに足るべき狀況を具せざるを以てなる乎、東京其物の猶混沌として七竅未だ成らざるが爲乎。蓋し東京は猶未製品なり。此故に我は東京兒なりといふが如き場合の少かるべきは當然の事に屬す。且又交通の便利は地域的感情を殺ぐこと大なるを以て、往時の江戸兒が江戸兒呼はりする如くに今日の東京兒が東京兒呼はりすることは少かるべき理なり。されば江戸兒呼はりせし往時と東京兒呼はりせぬ今とを比べて、直ちに今の民は今の都を愛すること淺しといふにはあらねど、さりとては又往時の人民が大都に對する愛情の熾盛なりし證の多きに比して、今の人民が首都に對する愛情の乏しからぬにあらぬ證の見難きぞ憾みなる。

都外の人民は姑く擱きて論ぜず、其地に住めるものにして其地を愛せざるべき理は無き筈なれば、蓋し今の東京人民が東京に對する愛情は決して乏しからぬなるべし。たゞ其愛情の發現して吾人の眼に入るに至るには猶幾干^{いくせん}の歲月を要するを以て、今日にては都民が都に對するの愛情甚だ冷やかなるが如く見ゆるなるべき歟。是の如くんば實に幸にして、歲月は花をして實とならしめ、酸きものをし

て甘きものとならしむるものなれば、今の首都の幾千の缺點は幾年の後に於て盡く除去せらるべきなり、吾人また何をか言はん。然りと雖も江戸の破壊せられ東京の建設せられてより、年を経ること既に三十年、強ち短しとのみ云ふべからず。此間に於ける人民が都に對する愛情の冷暖は、何等かの反應を呈せざるべからざるほどの年數ならずとせんや。試みに東京の現在を江戸の往時に比して、此の首都が何等の點に於て進歩し何等の點に於て退歩し、又若くは改善し若くは墮落せる狀況を考查せんもまた可ならずや。

之を多くの老人に質すに衆口一齊皆曰く、東京は江戸に比して事物の進歩驚くべき者あり、而して風俗の變化また驚くべき者ありと。其變化は良きかたにか悪き方にかと問へば、無言にして慄慄せざるもの殆ど無し。是豈東京の江戸に比して、有形に於ては進歩し無形に於ては墮落せるを表はすにあらずや。天に口ある無し、民之を語る、實に識者の一顧すべきところなり。夫今世紀の物質の進歩は宇宙の大勢にして、苟も世界を通じて吹くところの風の至らざる邊土孤島を除きては、皆花笑ひ鳥吟ずるの好光景を呈せざること無ければ、東京の江戸に比して有形に於ける進歩の大なるは、人民の其都に對する愛の結果と云はんよりは、世界の大勢之をして然らしめしと云ふを、むしろ適當の評言とすべきは何人も異存無きところなるべし。然らば無形に於ける墮落は抑、何に因由するや。是亦道義上の狀況が物質上の進歩と反比例を爲せるに近き疑ひある世界の大勢の、之をして然らしめしと云は